

家庭支援について

長崎 勤

近年の特別支援教育において、家族支援の重要性が指摘されてきています。

アメリカでは1990年のIDEA (Individuals with Disabilities Education Act) の中で、IFSP (個別家族支援計画 ; Individual Family Support Plan) として、障害児本人だけでなく、障害児の家族も支援の対象であることが明記されたのですが、日本でも、就学指導のあり方も大きく変わろうとしている現在、家族をエンパワーメントしてゆくことの必要性がさらに高まっているといえます。



家族支援に際しては、障害の説明や障害の特性に合わせた関わり方や支援制度についての客観的な知識をお伝えする情動的・スキルの支援の側面と、子どもの障害をどう受け止め、意味づけするかという、精神的な支援に大きく分かれるといわれています。

前半の情動的・スキルの支援では、知識的なことだけでなく、食事場面や、入浴、散歩など実際の日常的な子育てのなかで、具体的にどうかかわったら良いかを支援する必要があります。週の目標を決め、記録を書いてもらい、フィードバックをするといった方法も効果的でしょう。障害特性の説明や対応の説明では、専門用語ではなく、両親の理解の様子を把握しながら、わかりやすい説明が必要です。また障害という特性を持ちながらも、基本的には通常の「子育て」であることの意味を十分に伝える必要があります。障害児の成長(生涯発達)や教育・福祉などのサービスや制度(社会的リソース)利用の見通しについても随時提供し、医療・福祉の専門家との連携も不可欠です。

後半の精神的な支援が必要なのは、家族が障害について客観的に理解できたとしても、そのことをどう受け止めるかは、また別の側面であるためです。障害を持ちながらも、「我が子」として、ポジティブに育ててゆくことをどう精神的に支援できるかが専門家

の課題といえます。

昨年訪問した、アメリカの地域のセンター的役割を担う特別支援学校では、4名の家族支援の専門家がいて、在籍児を家庭訪問し、また必要な場合には担任教員や他の専門職と共に訪問し、家族支援する体制ができていました。わが国でも今後、家族支援の方向性の検討が必要になるかと思えます。

■現職教員研修生修了式

3月8日(金)文京キャンパスにて現職教員研修・研修成果報告会が実施され、5人の研修生が1年間の研修成果について報告を行いました。報告会終了後には、引き続き現職教員研修終了式が実施され、研修生の皆さんの晴れやかな表情が印象的でした。



研修生の報告書については貸し出しもいたしますので、ご希望の方はセンターにお問い合わせください。

現職教員研修生名と報告書タイトル	指導教員
繁本千尋 (静岡県立静岡北特別支援学校) 「知的障害特別支援学校における児童が活動，参加する授業づくり～支援環境に着目した授業改善の実践～」	藤原 義博
渡邊 美穂 (千葉市立あやめ台小学校) 「自分らしく生きる子どもを育てるための吃音指導の在り方ーナラティブアプローチに基づいた指導プロセスの開発ー」	左藤 敦子
佐藤 輝明 (北海道真駒内養護学校) 「肢体不自由特別支援学校における国語科の授業分析ー異なる教育課程の下で展開される授業の構造と指導方法の違いを探るー」	川間健之介
浅沼 千鶴 (千葉県立千葉特別支援学校) 「保護者が子どもの成長を実感できる継続した指導のための「個別の指導計画」の在り方ー自校の「個別の指導計画」作成の手順，形式ー」	安藤 隆男
藤田 錦一 (千葉県立袖ヶ浦特別支援学校) 「脳性まひ児の「表現する力」をはぐくむ授業づくり」	安藤 隆男

■現職教員研修生指導教員から

今年度、現職教員研修生の指導をしていただいた先生からの激励のメッセージです。



感謝し、さらなる発展を期待して

人間系教授 安藤 隆男

現職研修生の皆さん、1年間の研修ご苦労様でした。この間の皆様のご努力に心より敬意を表しますとともにこれを支えていただいたセンター並びに附属学校の先生方には深謝いたします。研修生には、毎年、つくばキャンパスでの研修活動を勧めています。図書館等の非日常に身を置き、思索のときを過ごしていただきたいからです。加えて、現職の先生方が研修に取り組まれる姿を学生に直に触れさせたいとの願いがあります。将来教職や研究者を志望する学生にとって、研修生は現場の風を吹き込み、新たな研究の視点を提供していただけるのです。ご協力をいただきました研修生には改めて感謝申し上げ、今後ますますのご発展を期待いたしております。



人間系教授・附属桐が丘特別支援学校長 川間健之介



研修生の皆様、1年間、お疲れ様でした。各自のテーマについてしっかりと研究を深めることができましたと思います。また、本学附属特別支援学校のそれぞれの実践についても身近に感じていただけたのではないのでしょうか。この1年の成果を持ってかえり、各自の現場でさらに実践を広げてください。

今後のますますのご活躍を期待しています。



■現職教員研修生の研修日記

千葉市あやめ台小学校 渡邊 美穂

今年、雪が多くて寒い日が続きました。本センターでの研修が始まった頃、近くの公園は桜が満開でした。あれから約一年が過ぎ、たくさんの特別支援に関する研修を受けさせていただきました。私はことばの教室の担当者であるため、これまで特別支援の中の言語に関する研修しかうけたことがありませんでした。ここでは、附属学校での参観をはじめ、理論、教材など様々な研修を受けさせていただきました。私にとっては、初めて学ぶことばかりでした。私の研究テーマは「生きる力」です。参観先の子どもたちが、生き生きと学ぶ姿がとても印象的でした。また、先生方の子どもたちへの熱心なご指導と思いがとても感動的でした。これまでの教職経験をもう一度見直し、新しい見方で子どもたちとかかわっていきそうです。お世話になった先生方に感謝をし、同じ現職教員研修生と過ごした日々をこれからも大切にしたいと思います。学ばせていただいたことを生かせるように、現場でがんばっていききたいと思います。貴重な一年をありがとうございました。



平成24年度 特別支援教育研究センター第15回主催セミナー シリーズ：特別支援教育の展開（4）

さまざまな障害種特別支援学校の学校間連携～筑波大学附属特別支援学校間の連携研究から～

日時：3月23日(土) 13:00～16:20

場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎 1階大講義室

プログラム

- | | |
|--|------------------------------------|
| 12:30～13:00 | 受付 |
| 13:00～13:10 | 開会挨拶・趣旨説明 |
| 13:10～15:30 | 筑波大学附属特別支援学校間連携研究報告 |
| ①「小中学校の特別支援教室に求められる役割と機能について」 | |
| ～10年間のセンター的機能から見えてきたもの～ | |
| 連携校：附属大塚特別支援学校、附属視覚特別支援学校、附属聴覚特別支援学校 | |
| ②「視覚認知機能に課題を抱える肢体不自由児の算数・数学科の学習指導法の研究」 | |
| ～視覚特別支援学校の算数・数学科の指導法を取り入れて～ | |
| 連携校：附属桐が丘特別支援学校、附属視覚特別支援学校 | |
| ③「運動発達に課題のある知的障害幼児の就学支援と移行支援のあり方について」 | |
| ～就学先決定と移行支援におけるシステムとツールの開発～ | |
| 連携校：附属大塚特別支援学校、附属桐が丘特別支援学校 | |
| 15:30～16:10 | 総合討論 まとめ 筑波大学特別支援教育研究センター教授 長崎 勤 |
| 16:10～16:20 | 閉会挨拶 |

お問い合わせ：特別支援教育研究センター 担当：間々田和彦 (03-3942-6923)

E-mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp

お気軽にお問い合わせください！